

9月21日（日）主日礼拝レジュメ

「大きな恵みによって」使徒の働き4章32節～37節

32節～35節は初代教会の内側がどのような状態であったのか、また初代教会の信仰者たちがどのような信仰生活を送っていたのかを知るために大切なことを私たちに教えている。

この箇所は、2章43～47節と多くの部分で共通している。例えば、2章44節「信者となった人々はみな一つになって」46節「心を一つにして宮に集まり」2章44、45節「一切の物を共有し、財産や所有物を売っては、それぞれの必要に応じて、皆に分配していた。」

御霊に満たされた一同は、外に向かってはみことばを宣教し、教会の中にあっては心を一つにして、すべてのものを共有にしていた。

32節で「信じた大勢の人々」→信徒が増し加えられ、大勢になった。それでも心を一つにするということと自分が所有しているものを自分のものと言わず、すべてを共有していたことだけは皆がしっかりと持っていた。

「だれ一人自分が所有しているものを自分のものと言わず、すべてを共有していた。」とは、クリスチャンになると、自分の財産を持つてはいけなとか、収入はすべて献金しなければならないということではない。強制されてとか、いやいやではなく、また人の目を気にして行うのではなく、まさに主を愛する愛、主への献身、主への感謝また隣人を愛する愛から喜んで、恵みとしてささげていく。それこそが、聖霊に満たされた者の信仰。

「大きな恵みが彼ら全員の上にあった」とは、教会全体、信徒全体に大きな恵みがあったということ。多くの人々が使徒たちの宣教を通して神の恵みを受けるとともに、一人も乏しい者がいなかった。

34節「彼らの中には、一人も乏しい者がいなかった」というのは、すべての信徒の敬虔さと神とお互いに対する献身の証しであった。それは、お互いがケアすべき家族であり大切な兄弟姉妹でわったということの証し。「地所や家を所有している者はみな、それを売り、その代金を持って来て」とありますが、私たちが考える以上に、持ち物を売ってそれを分配する必要は大きかったと思われる。

35節において使徒たちは神のことばを大胆に語り、主イエスの復活を証しするだけではなく、地所や家を売った代金を持って来たものを必要に応じて分け与える仕事まで担っていた。使徒たちは大きな恵みによって成し遂げた。

36節でバルナバが出てくる。「キプロス生まれ」=ディアスポラのユダヤ人(=離散の民、イスラエルから離れて外国で暮らすこととなったユダヤ人)つまりギリシャ文化のユダヤ人であった。レビ人=祭司となる立場で、本来財産を持ったりしないはずだったが、バルナバには自分が所有する畑があった。豊かですぐれた教育を受けていた。彼はもともとヨセフという名だったが、使徒たちからバルナバ(つまり慰めの子)と呼ばれていた。その彼が、所有していた畑を売り、その代金を持って来て、使徒たちの足もとに置いた。(37節)キプロス生まれのバルナバも一切のものを共有するわざに加わった。異国の出身であったバルナバも、一切のものを共有することで、ある意味異邦人とユダヤ人の壁が打ち壊され、まさに大勢の人々が一つであった。全く見返りを求めない、まさにキリストのからだである教会に、兄弟姉妹たちに対する無償の愛から出た献身という生き方が教会の中でなされていた。

人が一つとされるということは決して自然になされるものではない。むしろ、聖霊の満たしによる。教会には使徒たちのような人物が必要。それとと

もにバルナバのような自分の畑を売って、貧しい人に施し、この後になって人々がパウロの回心を疑っていた時にもパウロを自分たちの仲間として喜んで迎え、パウロの異邦人への宣教を助けるような人物や、ここには名前が出て来ていない、必要に応じて分け与えられるために自分の持ち物を売って、使徒の足もとに置いた、その他大勢のすべての人が必要。聖霊に満たされ、大きな恵みが教会全体の上であり、一人一人が恵みに生かされ、恵みを証しする群れでありたい。